

国語科は、 年中生徒と話ができる教科です

東京都台東区立御徒町台東中学校教諭

甲斐 利恵子



最近、国語教師として不安になることが多くなりました。生徒たちのつまらなそうな顔を見るとつらくなります。国語の教師になってよかったなと思うのはどんなときか、どうしたら生徒たちは楽しい顔になるのか、教えてください。

いきなり大きな問題に激突しましたね。生徒たちのつまらなそうな顔を見るのは本当につらいですね。わたしにもそんなときがありました。

この状況を一気に打破するようなことにはならないのですが、あるささやかな一場面を思い出したのでお話しします。

国語科だからできること

数年前の職員室でのことです。わたしは生徒の書いた作文に夢中になっていたようです。文章に反応してちよつとつぶやいていたのかもしれませんが、すると、すぐ近くにいた数学の先生が、わたしに向かって言いました。

「いいよなあ、甲斐さんは。国語の教師って、年がら年中生徒と話してるようなもんでしょ。こっちは教えなきゃいけないことが多すぎて生徒の気持ちなんて全然つかめないし、わかったかわからないが見えるから厳しいんだよねえ。」

じゃあ何ですか。国語は教えなきゃならないことなんてちつともなくて、生徒がわかったかどうかなんて関係なくて、数学と違って甘い世界なんですか。と、反論し

てもよかったのですが、そこは穏やかに応えました。

「ほんとですよねえ。国語科っていい教科ですよねえ。」

これはかなり本気で発言しました。生徒たちの書いた文章を読んで、こんなこと考えたのか、これはないでしょ、こういう意見言うなんて君もただ者ではないなんて。こんな楽しいひと時を過ごせるなんて、やはり国語科ならではなことではないでしょうか。

まずは、教師自身の果敢な挑戦を

では、「年中生徒と話しているような」状態になるためには、どのようなことが必要になってくるのでしょうか。先ほどの作文の例に限っていえば、生徒が本気で書いてくれているということが挙げられます。この学習では生徒たちが本気になるために、まず、書きたくなるための準備をしました。

先輩たちの書いた意見文を紹介して、先輩の言いたいことを一文で要約してみようという学習をしました。また、タイトル例をたくさん示したり、書き出しの例を

印刷したり。

もちろん、その準備をせずに楽しいひと時がやってくるはずはありません。「書きたい」「話したい」「聞きたい」「読みたい」という学習への意欲を創り出すという発想をもたなければなりません。そのための果敢な挑戦をしてみることから始めてはどうでしょうか。毎回同じような授業をしていけば、生徒たちは同じような表情を見せるでしょう。つまらなそうな表情を予想して気持ちが沈むより、こんなこと、あんなことと考えていた方が教師の表情も明るくなるはずです。自分が楽しくないことを楽しめとは言えないですよ。

じゃあ、自分が楽しければいいんですね、なんて言うてはいけません。どんな力を育てようとしているのか目標を明確にしつつ、その目標にこの教材がふさわしいかどうかを吟味することや、そのための「手びき」を具体的に考えることも必要です。

そう考えると、ホントにやり甲斐のある仕事ですね。生徒たちは「自分を伸ばしてくる教師」が好きなのであって、「おもしろい」とか「優しい」というだけでは、ついて来ないものです。

生徒たちが「書きたい」「話したい」「聞



生徒たちは「自分を伸ばしてくる教師」を求めているのです。生徒自らが「○○したい」と思うように、まずは教師自身が明るい表情で楽しんでやりましょう。

きたい」「読みたい」と思うにはどうしたらいいかを考えて、授業を組み立ててみてください。大変だけどきっと楽しい仕事になるはずです。